

岩窟の生活

「御聖人さま、おと^音きを持^食つてまいりました」

「これはこれは弥三郎殿の女房か、毎度ご苦勞さまでありますなあ、弥三郎殿はもはや漁にでられたかなあ」

「はい、とつくに漁にでてゆきました」

「この日蓮も漁師の息子でなあ……」

「まあつ、御聖人さまご冗談を……」

「これはこれはご冗談とは痛みいる。法華経という法船に日本国の一切衆生をのせてあやつろうとする船頭のこの日蓮も、実は漁師の息子じゃ、安房の国の海人^{あま}の子供だ。荒波を小守唄にきいて育つたこの日蓮、一寸やそつとの波なぞでは船酔はいたさぬ」

「本当でございますか……」

「本当とも、泳ぎも達者なものだ」

「その御見事な御身体で泳ぐところは立派なものでございましょう、だがその身体には全く御窮窟なこの岩屋すまい、おいたわしう存じます」

「いやいやなげかれては、こちらが痛みいる。樹木石上をすまいとするのが僧家のならい、しかも三度のおときを人目をしので運んで下さる。こんな有難いことがあるうか、南無妙法蓮華経……日蓮深く感謝しておりますぞ」

「お聖人さま……」

「なにかなあつ」

「お聖人さまは何故南無妙法蓮華経とお唱えになるのですか、この辺では皆南無阿弥陀仏とは唱えませんが、そのようには唱えません、変った唱えでございませなあ、しかもその南無妙法蓮華経を唱えるために、鎌倉を追われ、まな板岩に捨てられて、危ない命だったとききましたが、南無妙法蓮華経とはそんな有難いものでございませうか」

「有難いとて、有難いとて……まな板岩にすてられてもこのように生きておるではないか、しかもお手前の如きご婦人が食まで調べてわざわざ運んで来てくれるではないか、こんな有難いことがあるうか、すべてこれを法華経の御利益と申さねばならんのだ」

「まあ、それはお聖人さまが勝手にそう思ってるだけでございませうよ、私どもはただ助けただけでございますのに」

「ところが法華經にはお手前のことが既に書かれてあるのだ」

「ええつ、どんな風にですか」

「法華經第四に、及清信士女供養於法師云々とあつて、法華經を行ぜんとする者には、諸天善神等が、或は男となり、或は女となり、形をかえて、さまざまに、法華經を行ぜんとする者を供養して助くべしと經文に説かれてあるのじゃ、そして疑いなく、今この日蓮の前にお手前が供養に現われておる、法華經の經文に一字一句の間違ひもないではないか。不思議とは思わぬか……」

「そういえば不思議でございます」

「それ、それ、その不思議を法華經では南無妙法蓮華經と申すのだ。この世は不思議なことばかりじゃ。この川奈には南無妙法蓮華經と唱える人は一人もなく、みな南無阿弥陀仏だと只今申したが、その阿弥陀仏は、何処から生れてきたのかなあ、考えたことがあるか。阿弥陀仏も生れながらにして仏ではなかった筈。仏になる前には何という名であつたかと言うと法蔵という坊さんであつた。この坊さんが修行をして始めて阿弥陀仏という仏になつたのじゃ。では何を修行して仏になつたかというと、法華經を修行して仏になつたのだ。」

釈迦仏も法華經を修行されて仏になつたのだ。一切の仏、一切の菩薩がすべて法華經を修行して仏様になつてござる。お手前は只今日蓮に米の乏しいこの五月に食事を毎度運ばれて下さるが、日蓮が有難いといつてその食事を運んでいるだけであつたらどうじゃろう。お手前の志も無

になり、この日蓮もやせてしまう。食事はただかねば身の栄養とはならぬのじゃ。それと同様なこと、成ってしまった仏さまをいくら拝んだとて仏にはなれぬ。どうして仏さまになったかと、その道理をきわめ因果をきわめて修行することが仏になる道だ。仏さまもそう教えておる。特に今の時代は仏の教からいうと末法といって釈迦仏の唯一の法華経しかねうちのない時代になっておる。ところがこの仏の教にそむいて阿弥陀仏という、われわれにとつては一向に縁のない仏様を、日本国中の人々が拝んでおる仕末じゃ。御利益のあるう道理がない。御利益のない証拠が数年来の天変地天飢饉疫病となつて現われておる。弥三郎殿も、日蓮のいうところが理解されたようじゃ。女房殿も南無妙法蓮華経とお唱えなさい、これも不思議の法縁じゃ、恐らく日蓮が過去の父母がこの伊豆の伊東の川奈に生れきて、このように、すぎ洗濯、食物の世話までいたしてくれるのであらう。有難いことぞ。南無妙法蓮華経……」

「……南無妙法蓮華経……」

「おう南無妙法蓮華経と唱えられたなあ、目出度い……」

「はい、余りもつたいないことをお聖人さまがいわれるので思わず南無妙法蓮華経と口から出ました」

「それでよろしい。始めは誰しも大きな声で南無妙法蓮華経とは唱えられないものだ。さあ一緒にお題目を唱えよう」

「南無妙法蓮華經」――

聖人と弥三郎の女房とが一緒に岩窟の中で御題目を唱え終った時である。岩窟の外で、それにこだまする如く、

「南無妙法蓮華經」

「南無妙法蓮華經」

「南無妙法蓮華經」

と御題目の声がきこえてきた。弥三郎の女房がはつとして聖人の顔をみた時である。にっこり笑われた聖人はいった。

「日興………」

「お聖人さま………」

岩屋の中へ声ともに飛びこんできた。弟子の日興（十六歳）であった。背中に大層な荷物をしよつておる。大聖人の顔をみて力つきたか、岩にけつまずいたか、ドツとその場に倒れてしまった。

「おあぶのうございませす」

弥三郎の女房があわてて声をかけた。

「けがはないか………」

大聖人のいたわる声に、日興は、

「はい大事ありません」

といいながら、涙でくもる眼で大聖人をじつとみあげるのであった。

「鎌倉の様子はどうか」

「はい、お聖人さまが流罪になりました故、その弟子たる私どもにも何等かの処置があるかと思いましたが、それは全くございませんでした。お聖人さまの流罪がすでに一回の訊問もなしで不当の処分故、それ以上不当の処断をつづけることができなかつたとみえます」

「それは大慶、して皆無事か……」

「はい皆元気に信心を励んでおります。私はお聖人さまの船がでると、白帆をたよりにくが^陸じから走ってゆきたかつたのでございますが、日昭殿や日朗殿からお赦しが出ず今までぐずぐずしておりました。その代り、皆様からこのことづてや、食べ物をご覧下さい、この袋一杯しよつてきたのでございます。さあさあこの袋の中にはお聖人さまの好物のものが入っております……」

「私の好物のものとは何かなあ……」

日興は袋をひきよせると、紐をほどいて一番最初に竹の筒をとりだしたのである。

「この竹筒でございます……」

「あつはつはつ」

聖人は呵々大笑せられた。岩窟にびつくりする程聖人の笑い声はこだまして、日興と弥三郎の女房達の耳を心地よく打つのであった。

「それまでよく気づいたなあ」

「はいっ」

「有難い。早速賞美というところだが、何分にも流人の生活、少し遠慮しておこう」

「お聖人さま、それは何でございますか」

弥三郎の女房は竹筒を指さした。

「日興、弥三郎の女房殿がお尋ねじゃ。その竹筒の中はなんじゃなあ」

「くすりでございます」

「くすりといいますが、何のくすりでございますか……」

「ええつ、それは身体のあたまのくすりでございます」

「まあつ、鎌倉にはそんな結構なくすりがございますか、私の亭主はご存知の通り毎日漁に出ますので、身体がえろうひえて困ります、どうか、お弟子さま、私にもそのくすりを分けて下さいまし、お願いでございます」

「お聖人さま、なんといたしましたでしょうか」

「おお、弥三郎殿に分けるもあげるもよろしい、鎌倉の結構なくすり、竹筒ごと進呈してもよい、だが女房殿、弥三郎殿も毎晩用いておくすりじや、そう不思議がることはない」

「と申しますと、おさげでございませうか」

「さようじや」

「まあつ、お弟子さまのご冗談の上手なこと、おさげをおくすりなどと真面目にいつて」

「いやいや弟子が冗談をいつたのではない。五戒の中には、ひがごとを制するがために酒を呑んではならんという戒がある。大論には酒に三十六のとががあるといい、又梵網経にはさかづきをすすめる者、五百生に手なき身と生ずるといつて、酒を飲むことを禁じてある。但し、薬酒をば用うべしとある。日蓮が呑むのは薬酒であつて酒ではない訳じや」

「まあ左様でございませうか、結構なおくすりでございませうなあ、岩屋すまいの、筵の生活、早速お用いなさいませ、身体がひえることございませう」

「女房殿、今もいつた如く流人の生活、ちと遠慮しておこう。だが、近く地頭より呼び出しがあるから、その時には弥三郎殿とゆつくりいただこうと思つてゐる」

「お聖人さま……」

と日興は言葉をさへぎつて続けた。

「私めが、ここにくる途中、道々噂できいたこととございませうが、この地頭は病氣だそうで

ございます。しかも医者にも原因がわからず困っておるとききました。ようきいてみますと、不思議にもお聖人さまが、この地についた五月十二日の夕刻から発病したということでございます」

